

第5節 湖沼に生息する魚

上伊那には、天竜川の支流に発電用や砂防用などのダム湖がいくつかあります。また、農業用水等の目的のために沼や池も数多く存在しています。今回は、その中でいくつかを調査してみました。

1 身近な池にはどんな魚がいるのかな（池における生息種）



写真1 馬見塚公園内の池（駒ヶ根市）

写真1は、駒ヶ根市の馬見塚公園の中にある池です。近くに住む人々の憩いの場所になっており、朝夕に散歩する人や休日には釣りをする人で賑わいます。

人工池ですが、このようなところにも色々な魚が生息しています。池の周りの遊歩道を歩いていると大きく成長した体長50cmを超えるようなコイの群れを見ることができます。

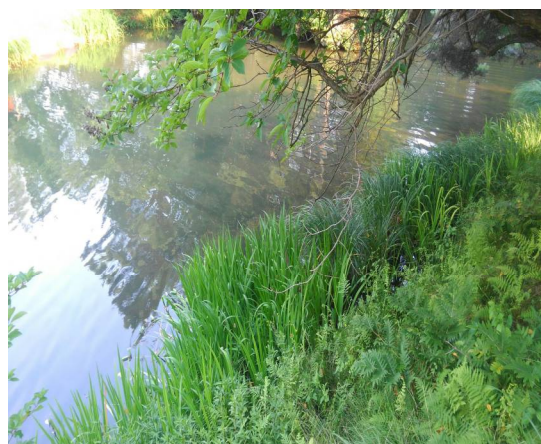


写真2 生い茂る水草

池の周りには、水生植物が群生しているとところや深い泥のところもあり、小さな魚たちにとっては、格好の隠れ家になっているようです。また、魚にとっては産卵場所としても有効な場所になっているはずです。



写真3 ^{うけ} 筌 を沈めたところ

写真3は、^{うけ} 筌 という魚を捕獲するための道具を沈めた様子です。（^{うけ} 筌 については6節を参照）

また、タモ網などを使ってどんな魚が生息しているか調べてみました。

なぜこんなな魚がいるのかな



写真4 モツゴ

大きく育ったモツゴです。モツゴは、天竜川本流や支流を含め、上伊那地方ではいろいろな場所に生息している魚です。クチボソと呼んだりもしますが、横から見ると細長い菱形のようにも見えます。富栄養化に強い魚で水の汚れや環境の変化にも耐えられる魚で泥が深く堆積したところにも生息できる魚です。馬見塚公園の池にも数多く生息しています。



写真5 ドジョウのなかま

深い泥のところに体長20cm近くまで成長したドジョウが確認できました。深い泥に加えて葦（あし）などの植物が生い茂っているので、ここまで成長できるのでしょう。



写真6 タイリクバラタナゴ

日本に昔から生息する在来種のニホンタナゴに似ていますが、名前の通り大陸から移入された外来種の魚です。写真6の中央に見える2匹がタイリクバラタナゴの幼魚です。背びれに黒色斑があるのが特徴です。ドブ貝などの2枚貝に卵を産みつけることで仲間を増やしていきます。雑食性で付着藻類や小型の底生植物を食べて生活しています。この魚は1940年頃中国から輸入され日本全国に広がってきました。熱帯魚を扱う店では、店頭で販売されています。この池にいるタイリクバラタナゴも最初はどこかの家庭で飼育していたものが放流されたことにより野生化したものと考えられます。



写真7 ブルーギルの幼魚

また写真7のように大量のブルーギルの幼魚も生息しています。外来魚は産卵する卵の数も多いのに加えて、卵を親が守るという習性も持ち合わせています。池の周りには外来魚の再放流禁止の注意書きがありますが、釣りをしたあと再び池に戻してしまうことで増加の一途をたどっていると考えられます。

2 こんなところにも移入魚がみられます（湖沼における移入種）



写真8 千人塚公園全景

飯島町千人塚公園にある人工池です。標高約840mのところにあります。以前、食用としてヨーロッパ産のシナノユキマスというマス科の魚が放流されましたが、定着することができなかった池です。この池は農業用水として利用されていますが、どんな魚がいるか調べてみました。

馬見塚公園の池にもいたモツゴがこの池には大量に生息しています。捕獲用のカゴ1個に一晩で100匹以上のモツゴが入っていました。元来天竜川や支流に生息していない魚ですが、この池はモツゴの楽園になっています。外来魚のブラックバスやブルーギルがいないことが大きな要因と考えられます。



写真9 オイカワとモツゴ

* 写真○の中がオイカワ

また、驚いたことにその中に混じって写真9のようにオイカワも生息していることがわかりました。本来、天竜川本流の瀬を中心に生息しているはずの魚がなぜこんなところにいるのでしょうか。この池が天竜川から遠く離れた場所にあることや遡上してくるような支流がないことから考えて、人為的にここまで運ばれ繁殖したと推測されます。



写真10 タモロコ

大量のモツゴに混じって、数は少ないものの、タモロコも生息しています。モツゴに似ていますが、顔が丸く全体的にずんぐりとしており、口ひげがあるので見分けることができます。田んぼの脇の用水路に多く見られたことから、タモロコと名付けられたと言われている。

3 ダム湖に棲む魚たち



写真1 箕輪ダム全景

箕輪町にある箕輪ダムです。もみじ湖と呼ばれ、ダム湖の周りにはたくさんのもみじが植えられています。秋には約1万本のもみじが美しく紅葉し多くの人で賑わいます。



写真2 ダム湖に注ぐ沢川

写真2は、天竜川の支流（沢川）です。冷たく、きれいな清流がダム湖に注ぎ込んでいます。



写真3 定置網を設置した様子

ダム湖と支流を行き来している魚を調べるために定置網を夕方に設置しました。定置網は川を遡上してくる魚が網に入ると出てこれない仕組みになっています。次の日の朝、どんな魚が入っているか確認してみました。



写真4 アマゴとイワナ

写真4は、大きく成長したイワナとアマゴの幼魚です。イワナは、自分より小さいものなら魚に限らず何でも食べてしまう魚です。アマゴは4cmほどですので、アマゴを補食しようとして追いかけて網の中に入ってきたと考えられます。



写真5 オイカワとアマゴ

写真6のように千人塚城ヶ池にもいたオイカワが生息しています。箕輪ダムの場所から考えるとやはり人為的に放流されたものが定着していると考えられます。

また、オイカワ以外にもウグイも確認することができました。ダム湖と支流を行き来しながら子孫を残しているのでしょう。



写真7 ワカサギ

写真7のように、ワカサギは目が大きくウロコが独特のきれいな輝きを出す魚です。ワカサギは、天竜川本流でも辰野町や箕輪町付近においては諏訪湖を下ってきたと思われる個体を見かけることができますが、ここ箕輪ダムにも生息しています。元々ここに生息していたものではなく、放流されたものです。天竜川漁協組合では、毎年ワカサギのふ化卵を1000万粒ほど放流しています。

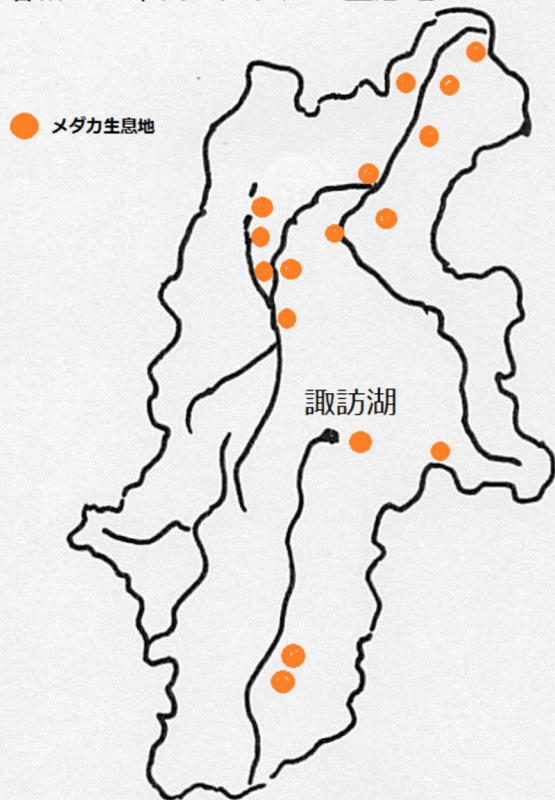
4 希少種になってしまった 野生のメダカ

はじめに

「めだかの学校」で昔から歌われていたように、日本を代表する童謡の中でメダカは親しまれてきました。それくらいかつては、日本中どこにでもいた魚だったのかもしれませんが。世界のメダカの分布域をみると、アジアの稲作地帯と一致しています。これは水田や用水路の環境がメダカの生息に適しているということです。メダカの属名Oryziatilisはイネの属名Oryzaに由来し、稲作文化と深い関わりをもっていることがわかります。日本のメダカは北海道を除いた日本全国に分布していましたが、生息環境の改変、農薬使用、繁殖力の強い外来種の進入などにより、激減しているのが今の現状です。結果、2003年に環境省が発表したレッドデータブックに絶滅危惧種と指定されました。

しかし、絶滅危惧種に指定されたことでメダカを守ろうとする保護活動が、メダカの遺伝的多様性を減少させる遺伝子汚染という新たな問題を起こしていると考えられます。元々南方系と北方系の2つに遺伝的に違いがあったにも関わらず、メダカ池やビオトープ池を作り、本来その地域にいるべきでない他地域産のメダカを放流したりした例もあります。また、観賞魚として品種改良されたヒメメダカを放流したという例もあるようです。いずれにしてもメダカをとりまく現状は大変厳しい状況にあることは間違いないと思われます。

昭和50年代のメダカの生息地



平成4年メダカの生息地



長野県においても昭和50年代に生息していた場所が、平成4年になるとわずか4カ所に減ってきている状況が見られます。しかし、千曲市を除いた生息地は天竜川水系であることから、さらに詳しい調査を行えば新たな生息地が見つかるかもしれません。

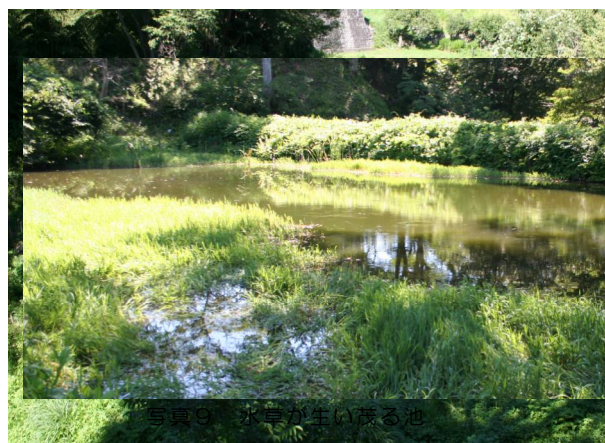


写真8 野生のメダカが生息する池

写真8は、人家から離れ、林に囲まれた自然豊かな池です。ここは上伊那でもほとんど見られなくなってしまった野生のメダカが繁殖している池です。池の周りもつる状の植物に囲まれており、写真9のように池の中にはたくさんの水草が育っています。メダカはこの水草に卵を産み付けてふ化後は、この中で大きく成長することができます。幸いこの池には、魚食魚である外来種のバスやブルーギルなどの魚は生息しておらず、他にドジョウやモツゴ、フナなどが生息していますが、お互いに共存することができていると考えられます。



写真9 野生メダカの群れ



写真10 メダカ拡大写真

写真9, 10のように野生のメダカは、体色が暗褐色です。メダカは、口が上向きに開いています。尻びれが幅広いのが特徴です。スーパーなどで売られている明るい肌色をしているものは、観賞魚として品種改良をされた「ヒメダカ」です。

最近では、正確には本来のメダカではないメダカを「メダカ」として売られている状況です。

昔は水田やその周辺の用水路、ため池などどこにでもいたメダカですが、水田環境の変化や農薬の使用による水質汚濁などにより生息地が激減している魚の1つです。国で絶滅危惧種に指定されるほど少なくなっていました。この上伊那の地においても、自然の状態でメダカを確認することが非常に難しくなってきた

てしまいました。この貴重な魚を何とかして残していかなくはいけません。